

# 岡山大学環境管理センター報によせて

岡山大学長 高橋 克明

岡山大学環境管理センターの歴史は、まずその草分けともいえるべき岡山大学特殊廃水処理施設が昭和50年に創設され重金属等を含有する無機系廃液の処理が開始された時点で始まったと申せます。ついで昭和52年に有機廃液処理施設が設置され、溶媒等有機物含有廃液の燃焼処理が行われるようになりましたが、それと同時にこれら両施設を併わせて環境管理施設とし、組織、名称が変更されました。その後昭和56年からは本学も、広域的な閉鎖水域である瀬戸内海に排水を排出する特定事業場として排水に関する総量規制の適用を受け、汚濁負荷量の常時計測を義務づけられることになったため、昭和56年より津島地区排水基幹整備に取りかかり、それまで混乱していた津島地区の排水系統の抜本的整理と改善が行われました。すなわち配管を雨水排水・実験洗浄排水・生活排水の3系統に分けるとともに、生活排水については合併処理槽による処理を行い、生活および実験洗浄排水に関し、COD自動計測器・pH計その他の計測器を設置して公共用水域へ放流される水質の常時監視を行うことになりました。したがって、それまで環境管理施設の主な任務であった廃液排水の処理に、さらに放流水質の監視と管理指導などの仕事加わることになり、改組の結果従来の無機廃液部門、有機廃液部門に洗浄排水部門および生活排水部門を加え技術開発室を備えた今日の環境管理センターが昭和57年6月に発足するに至りました。

もともと環境の問題に関しては戦後壊滅状態にあった我が国の生産活動が、急速な進展を見せはじめた昭和30年から35年頃までに、いわゆる「水俣病」や「四日市ぜん息」、  
「イタイイタイ病」などが大きな社会問題となり、公害の問題の深刻さが深く認識されるようになって以来、「公害対策基本法」をはじめ各種の関係法令等が相ついで整備されて今日に至っております。これらの諸法令等は、「環境を損なう恐れのある排出物を極力排出せぬことに努め、あくまでも排出者の責任において定められた許容限度を越えぬよう処理することを義務づける」という考え方を基本としております。

大学においては、大学本来の使命を遂行するため、常に活発な研究・教育活動が行われ

ております。多くの教職員・学生が、キャンパス内で日常的に活動する以上多種多様な廃棄物が生ずることを避けることはできませんが、学問の府としてその処理を万全に行うべきことは当然であります。それには個々人が十分な認識と知識を持ってそれぞれの責任において排出物を処理することが必須の要件であります。たとえば無機・有機の物質にしても、酸やアルカリにしても、ppm 値や pH 値 がどの位微細な量で変化するかを常時ははっきりと認識して取り扱うことが大切であります。僅か一人の一寸した不注意が排水に大きな不都合を生ずる結果を生むことを学生の一人一人に至るまで周知徹底して、環境保全のためのモラルを確立することが求められます。

環境管理センターの関係者各位は、冒頭に述べた同センターの歴史を通じて、一貫して熱心に岡山大学のために有害廃液の処理や水質の管理等苦勞の多い日常業務に当たってこられました。そのみならず、広く廃液、排水処理に関する技術指導員や水質管理員の養成および継続教育のための講習会等の開催をはじめ、学生の見学や実習の受け入れ等、全学に対する行き届いた啓蒙活動や教育指導を続けてこられました。この地道な御努力に対して深甚な謝意と敬意を表するものであります。

現在、急速な進展を見せつつある社会情勢に対応して、本学における研究・教育の内容もより一層多様化し、盛んにもなると期待されますが、それとともに各部局から排出される廃棄物も益々複雑化することが予想されます。この点につきましても本学の環境管理センターでは、従来から多様な廃棄物の分析法や処理法等に関する研究・開発についても力を入れると共に、大学等廃棄物処理施設協議会や関連学協会における活発な活動を展開し情報交換や共同研究等にも不断の努力を重ねてこられました。最近専任者のうちから学会賞等を受賞される方が出たことは慶賀に堪えぬところであります。

今のところでは、本学の環境管理に関する施設・設備の面でも、なお改善充実をはからなければならぬ点も多く、今後も益々拡充の必要性も生じてくると考えられます。センターの業務遂行の上で、また研究・教育等の態勢整備の上からも、環境管理センターの省令化も要請されております。国家財政の酷しい折柄、しかも本学として解決すべき問題が山積している現状のなかで種々の困難な面はありますが、今後ともその実現のために一層の努力をしてゆかねばならぬと考えております。

終りにあたって今一度、学内の一人一人がごく僅かの有害物質の取り扱いにも充分慎重な留意をすることによって、少しでも環境管理センターの御苦勞の軽減をはかるとともに本学の廃液・排水処理対策にも遺漏を生じないように、これまで以上の御配慮を皆様方をお願い申し上げたいと存じます。